



本連載は、情報発信のプロを目指す人を対象にしている。今回は、調べる資料の読み方・探し方の原点に立ち戻り、その基本プロセスを確認したい。それは、①資料に書かれている内容を正しく読み取る、②資料に書かれていない内容を調べる、③資料から意外性のある情報を発見しプラス α を加味した内容に仕立てる、である。

第四十三話 資料の読み方・探し方（1）

新聞・雑誌であろうとブログの記事であろうと、書かれている情報を正しく読むのは、簡単ではない。正しく読むには、一定の基礎学力と学識と努力が求められる。

まず、記事が正しいことを伝えている保証はない。明らかに間違った内容の場合も少なくない。書き手の専門的知識の欠如、紙面の制約、締め切り時間の制約などのため、内容が不適切だったり不十分な記事になっている場合も少なくない。

さらに、書き手は、アピールしたい部分や都合の良い部分を強調し、無視したい部分や都合の悪い部分には出来るだけ触れないようにしている。これは、官公庁の報告書、学者の研究論文、新聞記者のニュース記事、すべて同じである。

資料を素材として集め情報発信する者にとって、資料を正しく読むだけでは、仕事にならない。様々な資料を比較することにより、資料に共通する部分、異なっている部分、どの資料にも書かれていない部分を洗い出す作業が、必要となる。

この作業の中で、「意外性」のある部分を見つけ、意外性の部分の情報を説得力のある内容に、仕立てることがポイントとなる。このために、新たな資料収集と比較検討の作業が、不可欠となる。

ここでいう意外性とは、世間の常識を裏切ることを意味し、世間が「これ、本当？」という受け止め方をするものである。意外性の究極が、独創性である。真の独創性のある情報は、世間からは信用されない。それまでの世間の常識を完全に覆すことが、独創性の本質だからである。独創性は、素人が目指す目標ではない。

本稿の目指す意外性は、世間の常識から少し外れたプラス α を加味したものである。簡単にいえば、「目新しさ」である。新聞記事でいえば、昨日迄とは異なる内容

であり、かつ他社とは一味違う内容ということである。学者の論文も同じである。既存の論文に無い一味違う斬新な内容が、プラスαされていることである。

「意外性のある目新しい情報」を説得力のあるものにするには、それなりの仕掛けが必要となる。過去の常識を多少でも裏切るわけであるから、世間を納得させるだけの裏づけのある傍証を付加することが必要になる。

以上を整理すると、資料の読み方・集め方には、初級から上級まで3つのレベルがある。ただし、初級レベルが簡単だ、レベルが低いというわけではない。

- ・初級レベル：資料に書かれている内容を、正しく読みとる。
- ・中級レベル：資料に書かれていない部分の情報を洗い出し、それを調べる。
- ・上級レベル：書かれていない部分から意外性のある情報を発見し、説得力のある情報に仕立てる。

ウェブ媒体であれ既存の媒体であれ、情報発信のプロとなるためには、この3レベルをそれぞれクリアすることによって、正しい情報の把握、他と異なる情報の受信、それに基づく目新しい情報の発信が、可能になるのである。

次に、それぞれのレベルの内容について、具体的な説明と方法とを紹介することにしよう。

初級レベルの第一歩は、資料の記載に間違いが無いか、欠けている部分がないかをチェックすることである。これには、他の資料との比較読みが不可欠である。新聞記事であれば、スタンスの異なる複数の新聞記事を比較読みすることである。

新聞記事を始めほとんどの資料は、省略された部分が多く、5W1Hすら欠けているものも少なくない。ウェブ上の資料には、記載日が全く書かれていないもの、欠けているもの（たとえば、年次）が少なくない。省略されている部分は、他の資料を調べて補完しなければならない。

また、大事件のような場合、事件発生当初は情報が少なく、情報が錯綜している場合が多い。韓国のフェリー沈没事件（2014年4月16日発生）、マレーシア航空機MH370便の行方不明事件（2014年3月8日発生）など、情報が二転三転していた。事件が一段落するまでは、自分からの情報発信は控える必要がある。

次に、資料には、紛らわしい用語や誤解されやすい表現が沢山ある。資料の記述は正しくても、読み間違えする場合も少なくない。妙だなと思った用語や表現は、念のため辞書や事典で調べる習慣をつけておかなければならない。

たとえば、「派遣－請負」、「震度－マグニチュード」、「消費期限－賞味期限」、「国産牛－和牛」、「糖質－糖分」、「糖分控えめ－甘さ控えめ」、「後遺症－後遺障害」、「無期懲役－終身刑」などなど…。自分の専門分野も含めて、事典・辞書でコマめにチェックすることが求められる。

次に、国内と海外、東京と地方とでは、社会・経済の仕組みや生活習慣が大きく異なる場合があるので、十分な注意が必要である。現地を訪問すれば、その差異に気づくチャンスは高まるが、なかなか難しい。パソコンの前で資料を読む場合には、違いに気がつかず、勝手に誤解してしまう場合が多い。（続く）